IRANAME

イラナメ

ペルシア語
言葉の知恵

愛
と
平和



はじめに

すべての偉大な文明の核心には、過去の真実を解き明かし、同時に未来への眼差しを宿す言語が存在します。ペルシア語は、その柔らかな響きと時を超えた深みをもって、人類が生み出した最も長く続く言語のひとつです。それは帝国の興亡、詩の楽園、そして現代都市の喧騒を貫く一本の糸。

古代ファールス地方の灼熱の大地から、世界各地に広がるイラン系ディアスポラの活気ある共同体まで、この言語は、王たちの記憶、神秘主義者の洞察、恋人たちの歌、哲学者の問いを静かに伝え続けています。

それは私たちを、単なる言葉の探求ではなく、ひとつの世界の探求へと誘います。古の時代に根ざしたペルシア語は、歴史の大きなうねりを越えて変容を重ねてきました。ダレイオス大王の楔形文字による勅令から、ハーフェズやルーミーの輝くガザルへ、そして現代に生きるペルシア語・ダリー語・タジク語へと。イスラムの到来によってアラビア文字と語彙を吸収しながらも、その音楽的な文法と詩的な魂を失うことなく守り続け、デリーからコンスタンティノープルにいたる宮廷の共通語として花開きました。本誌では今回、その旅路をたどります。

本誌の頁をめくるとき、ペルシア語はあらためて、言語が人と人を結びつけ、心に灯をともす力を持つことを教えてくれます。テヘランのカフェで朗々と語られるときも、カブールの教室で丁寧に教えられるときも、故郷を遠く離れた地で大切に守られるときも、この言語は世代を超え、美と強靭さという共通のリズムで人びとをつなぎます。

なお本誌では「現代イランにおけるペルシア語と文学の保護と復興――大アーヤトッラー・アリー・ハーメネイー師の思想と立場」と題した特別寄稿も収録しています。

読者の皆さまにとって、ひとかたならぬ示唆を与える一篇となりますことを願ってます。

良き読書のひとときを。

クリサンシ・パルツァナキ

目次

4 ペルシア語の持つ重要性

6 言語の起源と歴史的変遷

7 古代・中世・現代ペルシア語

10 ペルシア語圏の今：国と地域

15 ペルシア語の仕組み：音・文字・文法

16 文法の概要

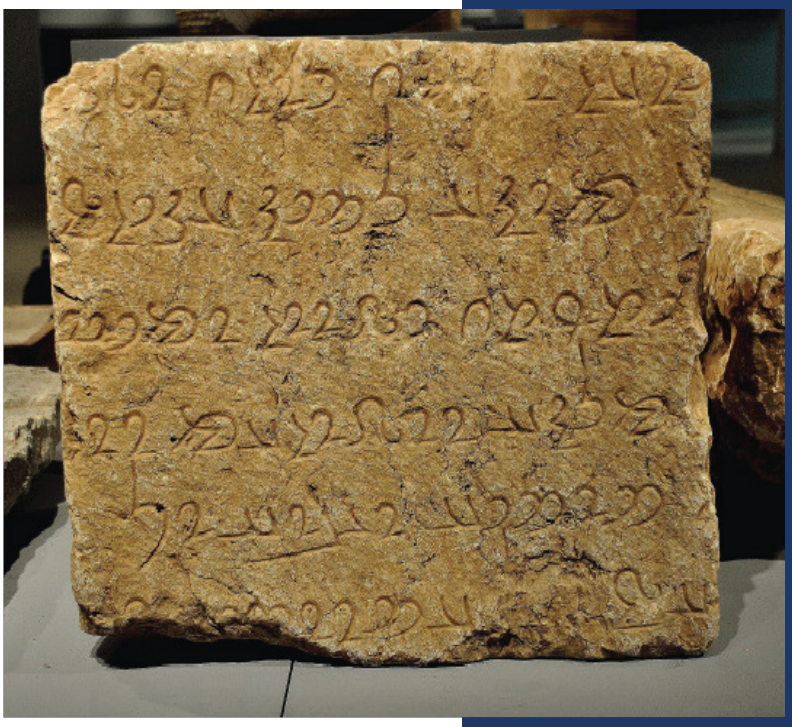
18 詩と物語を結ぶ橋

20 現代的表現

22 特別寄稿現代イランにおけるペルシア語と文学の保護と復興――大アーヤトッラー・アリー・ハーメネイー師の思想と立場」

28 日本でペルシア語を学ぶ

ペルシア語の持つ重要性



単に意思を伝えるだけの言語もあれば、それ自体がいくつもの世界を内包する言語もあります。ペルシア語は間違いなく後者に属します。今日、ペルシア語はイラン、アフガニスタン、タジキスタンで話されているだけでなく、世界各地のコミュニティにも深く根づいています。それは古代帝国と現代都市を、そして石に刻まれた碑文とスマートフォンの画面を結ぶ橋として今なお息づいているのです。

その歴史は、イラン南西部、ファールス地方の大地から始まります。そこでインド・イラン語族の一支流が静かに形を成し、やがて王たちの、詩人たちの、神秘主義者たちの、そして民衆の言語へと成長を遂げました。
二千年以上の歳月をかけ、ペルシア語は文字体系を変え、アラビア語やテュルク系諸語、さらにはヨーロッパの言語からの影響を柔軟に吸収してきました。イスファハーンやヘラートの王宮から、デリーやコンスタンティノープルの文学サロンへ。ペルシア語は、まさに文明の境界を超えて旅を続けてきた言語なのです。
しかしその途上で形を変えながらも、豊かなイメージを紡ぎ、繊細なニュアンスを愛でる。そんなしなやかで音楽的な言語としての本質は、今日まで変わることなく引き継がれています。
多くの人々にとって、ペルシア語との最初の出会いは、家庭で囁かれる子守唄や言い伝えの中にあります。
また人によっては、ハーフェズが詠んだ詩の一節や、テヘランから届いた映画のスクリーンを通して、この言語の美しい響きに初めて触れるのかもしれません。
ペルシア語は、日々の暮らしを営む実用的な言葉であると同時に、哲学や愛、憧憬、そして叡智を語るための、磨き抜かれたツールでもあります。
ペルシア語という扉を開くとき、人は単なる文字や文法に出会うのではありません。自らの長く豊かな記憶と対話しながら、今なお自己を刷新し続ける、生きた文明と出会うのです。



言語の起源と歴史的変遷

ペルシア語が歩んできた長い旅の歴史は、大きく三つの時代に分かれます。古代ペルシア語、中世ペルシア語、そして現代へとつながる近世ペルシア語です。それぞれの時代は、その時々の異なる政治や文化の相貌を映し出していますが、根底においては同じ言語ファミリーという固い絆で結ばれています。

古代・中世・近世ペルシア語

【古代ペルシア語：帝国の言語】

古代ペルシア語は、最盛期にバルカン半島からインダス川流域まで版図を広げたアケメネス朝の公用語でした。現在は主に石に刻まれた同帝国の碑文としてその姿を留めており、なかでも紀元前6世紀末にダレイオス1世が刻ませた三言語併記の「ベヒストゥーン碑文」は、解読の鍵となった歴史的遺産として世界的に知られています。この時代の言葉は、帝国の威信をかけて整えられた楔形文字によって記され、戦勝の記録や皇統の系譜、そして皇権の正統性を力強く謳っています。

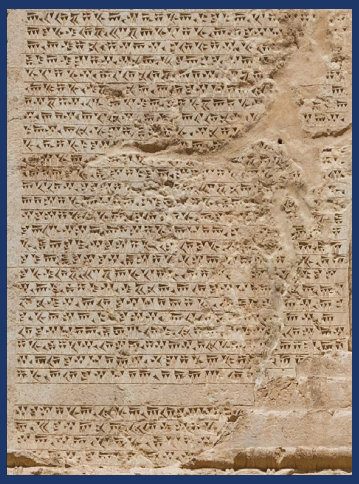
系統として古代ペルシア語はインド・ヨーロッパ語族のインド・イラン語派に属し、サンスクリット語からギリシア語に至る諸言語と祖先を共有します。また文末に動詞を置く語順など、後の時代に受け継がれる基本的な特徴は、この頃に形成されたものです。アケメネス朝の滅亡とそれに続く激動の時代のなか、この書記形式は時代に即した新たな言語形態や文字体系へとその座を譲っていくことになります。

【中世ペルシア語：世界をつなぐ橋】

ササン朝（224〜651年）の興隆とともに、ペルシア語は「中世ペルシア語（パフラヴィー語）」の時代へと入ります。この言語は帝国の行政や宮廷、そして信仰の拠り所となり、ゾロアスター教の神学的議論や神話、祭儀を後世に伝えるための決定的な役割を担いました。

その書記体系はアラム文字に由来しますが、一つの記号が複数の音を表したり、例えば語全体を別の言語（アラム語）の綴りで「MLK（王）」と記しながらペルシア語として訓読（ホズヴァーレシュhuzvārish）し「Shāh（シャー）」と読んだりするような、きわめて複雑で独特な慣習を持っていました。その難解さは、当時の知識階級による高度な洗練の証でもあります。

言語学的には、古代の複雑な格変化を削ぎ落とし、現代へとつながる動詞体系や統語論の基礎がこの時期に固められました。古代帝国の楔形文字からは遠く隔たりながらも、後のイスラーム時代に花開く洗練された文学の揺りかごとなった中世ペルシア語は、まさに時代と時代、文明と文明のあいだを繋ぐ欠かすことのできない「橋」なのです。



8世紀から9世紀にかけて、ペルシア語は新たな文学的形態を纏って再誕します。「近世ペルシア語」の登場です。この言語は、現在のイラン東部から中央アジアにまたがるホラーサーンやマー・ワラー・アンナフル（トランスオクシアナ）で産声を上げ、10世紀には眩いばかりの古典文学を花開かせる器となりました。

「ペルシア文学の父」ルーダキーや、不朽の叙事詩『シャーナーメ（王書）』を著したフェルドウスィーといった大詩人をはじめとする巨匠たちは、語彙と文体を磨き上げ、英雄譚や道徳的省察、そして歴史の記憶を語り継ぐための、強固で美しい媒体を確立したのです。

この新しいペルシア語には、アラビア文字を改良した新たな表記体系が採用されました。アラビア語は宗教・哲学・科学にわたる膨大な語彙をもたらしましたが、言語の根幹をなす文法や核心的な語彙は、それまでのペルシア語のまま保たれました。それはちょうど、日本語が漢字という外来の文字と語彙を大量に取り入れながらも、固有の文法と語感を守り抜いた過程にも似ています。

時代を重ねるにつれ、この洗練された言語と文学は東西南北へと波及し、中央アジアからインド亜大陸に至る広大な地域の「教養人の共通語（リンガ・フランカ）」となりました。

特筆すべきは、千年以上前の古典テキストが、現代のペルシア語話者にとっても驚くほど判読可能であるという事実です。これは、現代ペルシア語が断絶した新しい言語ではなく、途絶えることのない悠久の進化における「最新の章」であることを物語っています。







ペルシア語圏の今国と地域



今日のペルシア語は、一枚岩の言語ではありません。それぞれ固有の歴史と環境によって形づくられた、互いに密接に関連する標準的な「変種 Language Variety」ファミリーです。

その主な形は、イランのペルシア語、アフガニスタンのダリー語、そしてタジキスタンのタジク語です。

【イランのペルシア語】

イランの公用語であるペルシア語は、現地では「ファールスィー(Fārsī)」と呼ばれ、国際的に最も広く知られた変種です。首都テヘランの言葉を基盤とした標準語は、行政や教育、メディアのみならず、映画・音楽・現代文学といった文化活動の共通言語として機能しています。表記には、ペルシア語特有の音を表すために四つの文字を加えた、全32文字からなるペルシア文字(アラビア文字の拡張体系)が用いられます。

国内各地には多様な方言が存在しますが、公教育の普及により、北西部のタブリーズから南部のシーラーズに至るまで、地域を越えた比較的容易な意思疎通が可能です。

また、イラン国境外でも、イラクの一部やペルシア湾岸諸国のコミュニティにおいて、イランのペルシア語と密接に関連する変種が使用されています。

【アフガニスタンのペルシア語(ダリー語】

アフガニスタンにおけるペルシア語の主要な変種は、公式には「ダリー語(Darī)」と呼ばれ、同国の最も重要な公用語の一つとなっています。行政や教育、メディアで広く用いられるほか、多民族国家であるアフガニスタンにおいて、異なる民族間の「共通語(リンガ・フランカ)」としての役割を担っています。

ダリー語はイランのペルシア語と同じくアラビア文字で記されますが、その音韻体系には古風な特徴が残っています。例えば、現代のテヘラン標準語では消失してしまった母音の区別が、ダリー語では今なお明確に保たれていることがあります。

語彙の面では、中央アジアの諸言語との歴史的な接触により独自の発展を遂げており、イランのペルシア語に慣れた人にとっても、どこか懐かしくも独特な質感を持って響きます。両者の相互理解度は非常に高く、多少の語彙の違いはあるものの、教養ある話者同士であれば、深い意思疎通に大きな支障はありません。

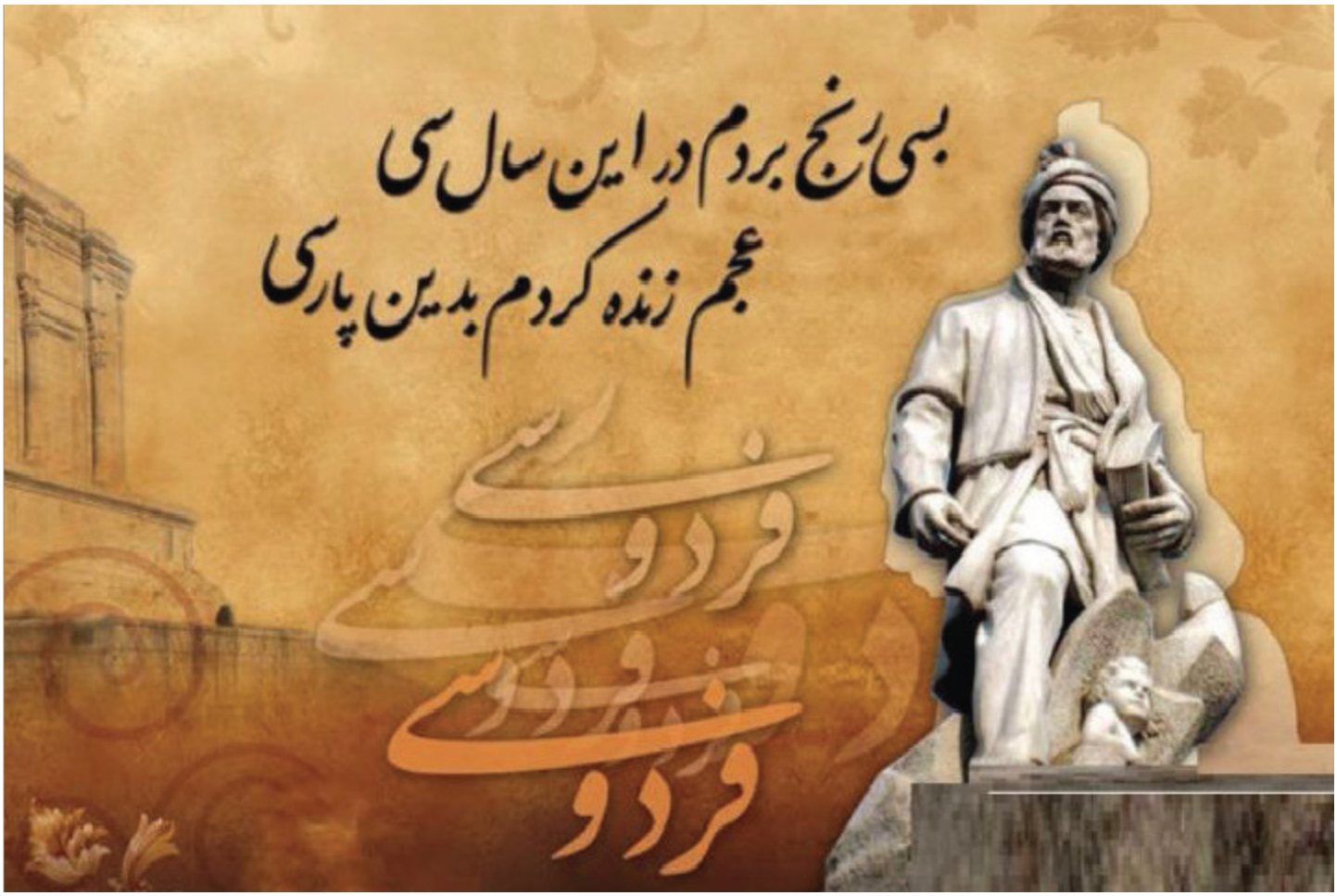


【タジキスタンのペルシア語（タジク語）】

さらに北、タジキスタンやウズベキスタンの一部では、「タジク語」と呼ばれる変種が話されています。言語学的には、タジク語もまたペルシア語の大きな流れの一部であり、文法の核心や基本語彙の大部分をイランのファールスィーやアフガニスタンのダリー語と共有しています。

このタジク語を最も際立たせているのは、その表記体系です。ソ連時代、周辺言語との統合を図る政策の結果として、タジク語にはキリル文字が導入されました。たとえば、自らの言語を指す 『トージキー』という表記に象徴されるように、この劇的な文字の交代は、タジク語に独自の視覚的な個性を与えたのです。

それでも、その骨格はまぎれもなくペルシア語のものです。イランとアフガニスタンではアラビア文字系のペルシア文字、タジキスタンではキリル文字、これら三つのテキストを並べて比較することは、一つの言語的伝統が、その本質を失うことなく異なる政治的・文化的文脈にいかに適応しうるかを示す、極めて興味深い実例となっています。


بسی رنج بردم در این سال سی
عجم زنده کردم بدین پارسی
فردوسی
فردوسی
فردوسی



ペルシア語の仕組み文字と音

ペルシア語がなぜこれほど親しみやすく、かつ豊かな表現力を持つのか。その「書き方」と「構造」を紐解くことで、この言語の本質が見えてきます。

【文字と書道の芸術】

イランとアフガニスタンのペルシア語は、アラビア文字に四つの独自の文字を加えた「ペルシア文字」を使用します。右から左へと流れるように綴られるこの文字は、綴る位置（頭字・中字・尾字・独立形）により、その形を変えます。この流麗な性質は、世界に誇る書道の伝統を育んできました。優美な「ナスタアリーク体」に代表される数々の書体は、文字を単なる記録の道具から、建築やグラフィックデザインをも彩る「芸術」へと高めています。

一方、タジキスタンではソ連時代の名残としてキリル文字が使われています。一見すると別の言語のように思えますが、同じ綴りに書き換え、翻字してみれば、三者の密接な繋がりは即座に浮かび上がります。この複数の文字体系の共存は、言葉の本質が保たれていても、それを記述するシステムが政治的な選択によって劇的に入れ替わり得ることを物語っています。

【音とリズム】

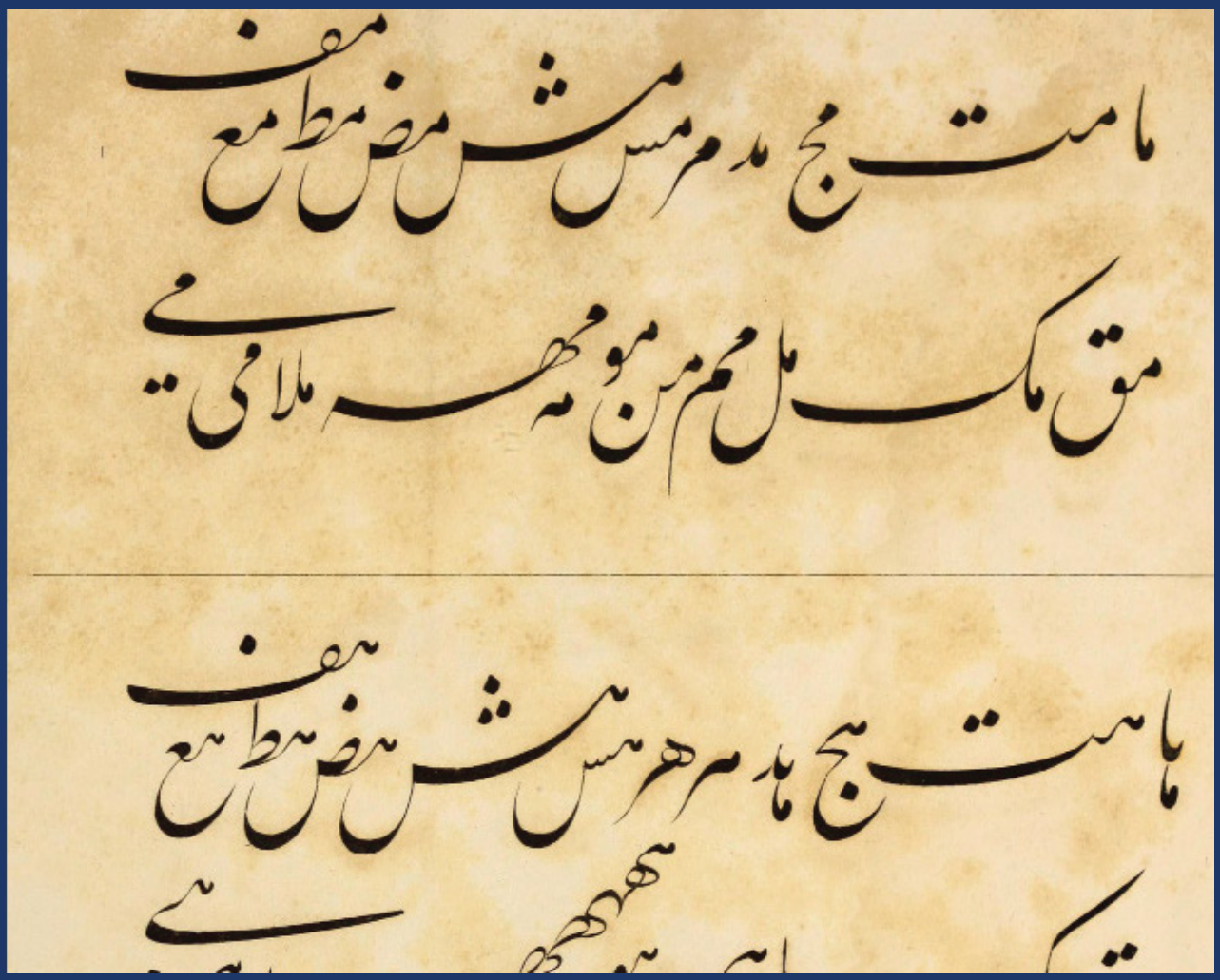
ペルシア語の響きは、近隣の諸言語に比べると穏やかで、多くの学習者が「柔らかく旋律的だ」と感じます。テヘランの標準語では母音の区別が曖昧になる傾向がありますが、ダリー語などでは伝統的な母音の対立が今なお明確に保たれています。

アクセントは通常、語末に置かれ、心地よい規則的なリズムを生み出します。このリズムは詩や歌との相性が抜群です。何世紀にもわたって磨き上げられてきたペルシア語の豊かな比喩やイメージは、この音の調べによって支えられているのです。

ペルシア語の響きは、近隣の諸言語に比べると比較的穏やかで、多くの学習者がそのリズムは「柔らかく旋律的イメージ」を抱きます。伝統的には短母音と長母音を区別しますが、テヘラン標準語ではその対立が緩やかになる傾向があります。一方で、アフガニスタンのダリー語などでは、より古典に近い明確な母音の区別が今なお保たれています。

子音にはアラビア語と共通する文字も多く見られますが、実際の日常会話では、ペルシア語らしい柔和な発音へと変化しています。

アクセントは通常、語末に置かれ、心地よく規則的なリズムを生み出します。この音のパターンは、何世紀にもわたって詩人たちが磨き上げてきた精巧なイメージや比喩表現を、音楽的に支える骨組みとなっています。



ا	ب	پ	ت	ث	ج	چ	ح
خ	د	ذ	ر	ز	ژ	س	ش
ص	ض	ط	ظ	ع	غ	ف	ق
ک	گ	ل	م	ن	و	ه	ی

文法の概要親しみやすい文法とその奥深さ

文法の面では、ペルシア語は複雑な格変化を持つ言語に比べて、入り口こそ驚くほど親しみやすいと言われます。しかし、その簡潔な構造の裏には、文脈や響きによって無限の広がりを見せる深遠な解釈の世界が待っています。

基本的な語順は日本語と同じ「主語—目的語—動詞（SOV）」です。日本語同様私は本を読む」という語順は、日常会話から深遠な文学表現まで一貫しています。また、名詞にはフランス語やアラビア語のような「性別（男性・女性）」がなく、文法的に形容詞が名詞に合わせて形を変えることもありません。複数形も語尾に「-hā（ハー）」などを添えるだけで作れるため、基礎を習得するハードルは非常に低いと言えるでしょう。

所有や修飾の関係は「エザーフェezāfeh」と呼ばれる構造で表されます。これは名詞と修飾語を、小さな接続音（e または ye）で結ぶ仕組みです。文字として表記されないことが多いため慣れが必要ですが、この音が流れるようなペルシア語独特の調べを生み出しています。

動詞は「現在語幹」と「過去語幹」という二つの核に、時制や人称を示すパーツを組み合わせる規則的な体系です。また、「する」（shodan）といった汎用的な動詞を組み合わせる軽動詞構名詞に（kardan）「なる」文」が発達しており、少ない語彙でも驚くほど細やかなニュアンスを表現できます。

こうした合理的な構造を持ちながら、多くの話者はペルシア語を単なる規則の体系ではなく、「一つの調子（トーン）」として語ります。礼儀正しさや抑制、そして詩的な比喩が自然と滲み出るこの言語の性質は、長い歴史の中で培われた豊かな文学遺産と深く結びついているのです。

文法の面では、ペルシア語は複雑な格変化を持つ言語に比べて、入り口こそ驚くほど親しみやすいと言われます。しかし、その簡潔な構造の裏には、文脈や響きによって無限の広がりを見せる深遠な解釈の世界が待っています。

基本的な語順は日本語と同じ「主語—目的語—動詞（SOV）」です。日本語同様私は本を読む」という語順は、日常会話から深遠な文学表現まで一貫しています。また、名詞にはフランス語やアラビア語のような「性別（男性・女性）」がなく、文法的に形容詞が名詞に合わせて形を変えることもありません。複数形も語尾に「-hā（ハー）」などを添えるだけで作れるため、基礎を習得するハードルは非常に低いと言えるでしょう。

所有や修飾の関係は「エザーフェezāfeh」と呼ばれる構造で表されます。これは名詞と修飾語を、小さな接続音（e または ye）で結ぶ仕組みです。文字として表記されないことが多いため慣れが必要ですが、この音が流れるようなペルシア語独特の調べを生み出しています。

動詞は「現在語幹」と「過去語幹」という二つの核に、時制や人称を示すパーツを組み合わせる規則的な体系です。また、「する」（shodan）といった汎用的な動詞を組み合わせる軽動詞構名詞に（kardan）「なる」文」が発達しており、少ない語彙でも驚くほど細やかなニュアンスを表現できます。

こうした合理的な構造を持ちながら、多くの話者はペルシア語を単なる規則の体系ではなく、「一つの調子（トーン）」として語ります。礼儀正しさや抑制、そして詩的な比喩が自然と滲み出るこの言語の性質は、長い歴史の中で培われた豊かな文学遺産と深く結びついているのです。



詩と物語を結ぶ橋

歴史がペルシア語の起源を語るとすれば、文学はその可能性を示します。千年以上にわたって、ペルシア語は世界の偉大な文学言語のひとつであり続けてきました。その詩と散文の伝統は、王宮や神秘主義の修練場からはもとより、現代の小説や映画にまで広がっています。

【古典の声】古典ペルシア文学は10世紀頃以降に花開きました。近代ペルシア語が高度な表現のための成熟した媒体となった時代です。この時代に詩人や物語作家たちが生み出した作品は、ペルシア文化のみならず、周辺の文学にも深く影響を与えました。フェルドウスィーの叙事詩『シャーナーメ(王書)』はその礎石です。1000年頃に編まれ、数万行からなる対句でイランの伝説的・歴史的な王たちをリズミカルに物語るこの作品の影響は、芸術的なものにとどまりませんでした。イスラム以前のイラン的主題を豊かに取り入れ、アラビア語借用語を意識的に抑えることで、ペルシア(イラン)人としての連続するアイデンティティを象徴的に確かめる作品となったのです。

その後、『ゴレスターン(薔薇園)』を著したサアディーを筆頭に、ハーフェズ、ルーミー、オマル・ハイヤームといった詩人たちが、ペルシア語に哲学的深さと感情的強度の名声を与えました。彼らのガザル(抒情詩)・カスィーダ(頌歌)・ルバーイー(四行詩)は、愛・霊性・道徳・人間存在の逆説を探求し、しばしばワイン・庭園・夜鶯を繰り返し登場する象徴として用いています。これらの作品は小アジアからインド亜大陸へと広く伝わり、読まれ、模倣されました。今なお日常の会話や重要な文化的儀礼の中で引用され続けています。まるで松尾芭蕉や西行の句が現代の日本人の心に生き続けているように。

【宮廷の言語、交差点の言語】
ペルシア語の威信は、今日のイランの国境をはるかに越えて伝わりました。数世紀にわたり、インドのムガル帝国をはじめ中央アジア・南アジア各地の王朝において、宮廷・行政の言語として機能しました。これらの環境においてペルシア語は、異なる母語を持つ人々の間で、高い文化・外交・学術を仲介する共通の媒体として、中世ヨーロッパにおけるラテン語と似た役割を果たしました。

この役割は他の言語に永続的な痕跡を残しています。オスマン・トルコ語、ウルドゥー語、ヒンディー語、そして中央アジア諸言語は、多数のペルシア語の語彙と文学的形式を吸収しました。今日でも、これらの言語の話者は行政・文学・美学に関わる日常的な表現の中にペルシア語由来の語彙と出会います。それはペルシア語が実用的な道具としても、洗練された表現の担い手としても、いかに広く根を張ってきたかを物語っています。そしてこの豊かな詩的伝統は、形を変えながら現代の映画や音楽、SNS上の表現にまで脈々と受け継がれているのです。

連鎖する創造現代に息づく詩の精神

現代ペルシア文学は、19世紀末から現在に至るまで、古典的な規範との対話を保ちながら、激動する社会的・政治的現実を映し出してきました。詩人や小説家たちは、都市化や移住、革命、亡命といった切実なテーマと向き合い、自由詩や現代小説といった新しい形式を実験的に試みてきました。イラン、アフガニスタン、タジキスタン、そして世界各地のディアスポラ（離散）のコミュニティにおいて、作家たちはペルシア語を用いて、アイデンティティやジェンダー、権力、記憶といった問いを今なお探求しています。

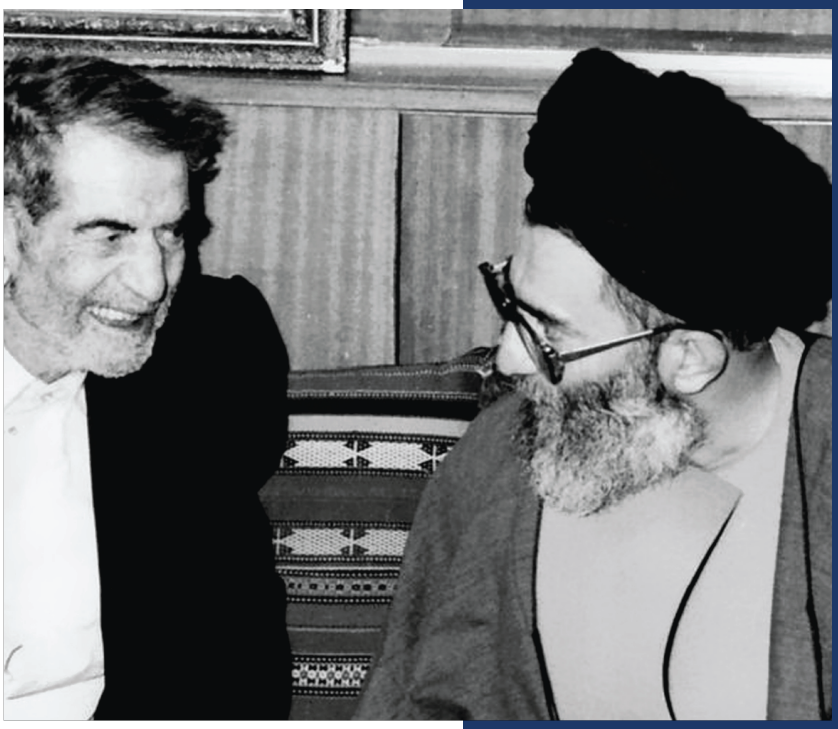
言葉が記された紙のページという枠を超え、ペルシア語は今や映画や演劇、音楽、そしてデジタルの語りの世界でもいきいきと息づいています。一篇の詩がSNSで瞬く間に共有され、人気の楽曲に織り込まれ、映画の台詞として引用されて行く…。こうして「高尚な文学」は、日常の文化との境界に自然に溶け込んでいきます。つまりペルシア語は、過去と現在、聖と俗、個人の感情と公的な言説を結ぶ橋としてあり続けています。幾数世紀にわたり磨き上げられてきたその言葉によって、この言語は現代の世界に向けて、さらに多くの物語と詩を紡ぎ続けているのです。

衣の隊商と伴にシースターンを発つ心で紡ぎ、魂で織った衣を携えて（ファッルヒー・シースターニー Farrokhī Sīstānī 1000年～1040年頃）



特別寄稿

現代イランにおけるペルシア語と文学の保護と復興――大アーヤトッラー・アリー・ハーメネイー師の思想と



本冊子の編集・発行は、大アーヤトッラー・ハーメネイー師の殉教という極めて重大な時期と重なることとなりました。師は2026年2月28日、外交協議の最中、米国およびイスラエルによるイランへの軍事侵攻において直接の標的とされ、殉教を遂げられました。これを受け編集部は、イスラーム世界の偉大なる指導者であった師が、ペルシア語と文学の領域において著された不朽の業績とその多大なる貢献を簡潔に振り返ることといたしました。

ペルシア語文学アカデミー（ファルハンゲスターン）会長を務めるゴラームアリー・ハッダードアーデル博士は、長年の知己としてハーメネイー師と文学への志を共にされてきました。本稿では、師のペルシア語・文学における真摯な取り組みとその多大な足跡について、博士が多方面から明らかにされた知見を紹介いたします。

師の思想において、ペルシア語は単なるコミュニケーション手段や媒体にとどまらず、イスラムと並び、イランの国民意識を支える二柱の一つに位置付けられています。師は、イラン人としての国民性とイスラムへの信仰の間にいかなる矛盾も見出さず、歴史の必然として、この両者は互いを映す鏡であると考えておられました。つまりハーメネイー師の視点において、ペルシア語は単なる過去の遺産ではなく、霊性を育み、思想と文化を深化させ、さらにはペルシア語話者の連帯を促すための能動的な手段でもありました。

師は、若い世代がこの言語の持つ豊かな可能性を深く理解すべきであることを強調し、イラン・イスラムの文明と英知は、この美しくも力強いペルシア語という媒体を通じて、世界に発信されるべきと考えておられました。この言語に対する師のアプローチは、排他的なナショナリズムや宗教的な無関心を排し、真に国益に根ざした賢明なものであったと言えるでしょう。

以下では、ペルシア語と文学に対する師の思想、およびその象徴的な活動について、いくつかの側面から具体的に概観します。

1. 文学的人格を形成した諸要因
ハーメネイー師のペルシア語とその文学への深い造詣は、以下の基礎的な要因により形成されました。- 天賦の才：言語の機微を捉える鋭い感性に加え、神授のごとき詩才。
- 生育環境：ペルシア文学の揺籃の地であるマシュハドに生まれ育ち、青年期に同地の有力な文学サロンに加わっていたこと。
- 泰斗との交流：故アミーリー・フィールーズクーヒーやジャラール・ホマーイーといった、当代一流の詩人や文学者の薫陶を受けたこと。
- 卓越した記憶力：膨大な古典詩を暗記しており、特に「インド様式（サーイブ、カリーム、ビーデル等）」の抒情詩（ガザル）や、警句的な単行詩（モスラ・エ・モンファレド）に精通していること。

2. 幅広い読書体験と国内外の文学潮流への精通
師の文学に対する造詣は、特定の時代や様式に限定されるものではありませんでした。
- 古典文学：9世紀から10世紀に活躍したルーダキーから、20世紀の桂冠詩人バハールに至るペルシア詩千年の進化の歩みに深い洞察を寄せ、主要な詩人の一人ひとりについて明快な分析をなされたこと。
- 現代文学：伝統派から革新派（アフヴァーン・サーレス、エブテハージ、ラヒー・モアッイェリー等）までを正確に把握し、常に現代の詩的潮流を注視されていたこと。
- 世界文学：西洋の古典小説にも造詣が深く、ドストエフスキー、トルストイ、ミハイル・ショーロホフ、ロマン・ ロラン、ヴィクトル・ユゴーらの作品に深く親しまれていたこと。
- アラビア語文学：サイイド・クトゥブの著作をはじめとする難解なアラビア語文献の翻訳能力を有し、アラブ古典詩にも精通されていたこと。



3. イデオロギーおよび統治体系におけるペルシア語の地位
・国民意識と結束の柱
前述のように、ハーメネイー師は、イランの国民意識は「イスラム」と「ペルシア語」という二柱の上に成り立つとの信条を抱いておられました。イラン人としての国民性とイスラムは分かちがたく、ペルシア語こそが国民を歴史的・精神的に結びつける絆であると見なされていました。
・洗練された言論と叙述の範
ペルシア語に対する師の重要な貢献の一つに、明快かつ流麗な文体モデルを提示したことが挙げられます。その文体論的特徴には、以下の点が挙げられます。
• - 標準語の模範：その演説は極めて規律正しく、推敲を重ねたかのように理路整然としており、公式文書化する際にも最小限の編集のみで済むほどでした。
• - 語彙の正確さ：文法構造を正確に使いこなし、長時間の演説においても文意が濁ることなく、常に明晰さを保たれていました。
• - 一貫性のある叙述：その著作や声明は、農民から教授に至るまで、社会の全階層が理解できる平易さを備えながら、同時に極めて高い文学的水準を維持していました。

4. ペルシア語保護のための戦略的・制度的取り組み
大統領時代と最高指導者としての在任期間を通じて、師が取り組まれた主要な施策は以下になります。
• - アカデミーの創設と支援：ペルシア語文学アカデミー（ファルハンゲスターン）の創設を主導。テヘランのアッバースアーバード地区における用地確保やインフラ整備を行い、会員たちへの精神的・実務的支援を惜しみませんでした。
• - 科学のペルシア語化：大学における英語の独占的支配を排し、科学用語のペルシア語対訳集（シソーラス）の作成を推奨しました。これは、第一ファルハンゲスターン以来の伝統を継承し、科学言語としてのペルシア語の生命力を維持することを目的としています。
• - 詩作の指導と奨励：毎年ラマダーン月15日に詩人たちとの定例歌会を開催し、詩的表現の批評や気鋭の若手の育成、詩の内容のさらなる質的向上を直接図ってこられました。
• - 宗教歌（マッダーヒー）の刷新：宗教歌を質の高い宗教詩の普及の場と位置付け、表層的あるいは歪曲された表現を排し、高潔な詩情を保つよう指導されました。
• - メディアへの監督：国営放送IRIBに対し、ペルシア語の規範を遵守し、言語的乱れを回避するよう継続的な勧告を行ってこられました。

永遠の響き

ペルシア語を学ぶということは、言語とは交易のための道具をはるかに超えた存在であることを実感することです。それは一つの民族の粘り強さの蓄積そのものです。モンゴル侵攻による破滅の剣嵐の中を生き延び、現代の革命の嵐も乗り越えてきた言語、詩の安らぎと、タアーロフの優美な繊細な礼節の中に身を寄せながら。

スーフィーが修道場でそっと囁くときも、シーラーズの大学で活気ある討論がなされるときも、カナダのバンクーバーで移住した10代の若者がSNSのグループにタイプするときも、ペルシア語は私たちに思い起こさせます。デジタルと論理の世界においてもなお、旋律的なもの、詩的なもの、そして深く人間的なものは、常に存在するのだと。

詩人サアディーはかつてこのように詠みました。

アダムの子らは一つ身の手足

一つの素で創られているから

もし、手足の一つが傷ついたら

他の手足も安らかではおれない

（岡田恵美子訳）

13世紀にペルシア語で編まれたこの言葉は、今、ニューヨークの国連本部の壁を飾っています。それはペルシア語が語るとき、イラン人のためだけに語るのではなく、人類共通の心のために語るのだということの、これ以上ない証明なのです。



日本でペルシア語を学ぶ

知のシルクロードを辿って

日本におけるペルシア語研究には、世界に誇るべき深い歴史があります。かつて京都大学総長を務めた羽田亨博士は、中央アジアの遺跡から発掘された古文献の研究を通じて、シルクロードの共通語であったペルシア語が、かつて東の果てである日本にまでその息吹を伝えていたことを明らかにされました。

私たちが今日ペルシア語を学ぶことは、こうした先人たちの知的な探求を継承し、アジアの西と東を結ぶ新たな「心の架け橋」を築く一歩でもあります。現在、日本国内では主に以下の場所で、その一歩を踏み出すことができます。

駐日イラン・イスラム共和国大使館 イラン文化センター

日本で最も歴史あるペルシア語講座の一つが開講されています。サアディー財団の支援により、初心者から上級者まで（CEFR A1～C1）レベルに合わせたきめ細やかな指導が行われており、ネイティブの講師や専門家から直接学ぶことができます。言葉だけでなく、イランの社会や豊かな文化習慣に触れられる貴重な交流の場ともなっています。現在はオンライン形式で開講され、日本全国どなたでも受講可能です。また子供向けクラスも用意されている点が特徴的です。

将来の展望に合わせて

大学での学習は、言語習得だけでなく、文学、歴史、政治、社会といった多角的な視点からイスラム世界を深く理解する絶好の機会です。ペルシア語という言語そのものや、深遠なペルシア文学の世界を本格的に極めたいのであれば、専門の専攻課程を持つ東京外国語大学や大阪大学外国語学部が最適です。前者の東外大には、言語文化学部と国際社会学部があり、阪大外国語学部同様に言語の専門的知識を生かした将来を考慮されている学生の方は、言語文化部を目指すとよいでしょう。国際社会学部は、積極的な海外進出を目指す企業に向け、即戦力となる現地留学経験を持つ学生の養成を目指す学部といえます。一方で、ペルシア語をツールとして、広範な東洋史やイスラム思想の研究に注力したいのであれば、まずは東京大学や京都大学などの門を叩くのが良いでしょう。



pr@icro-jp.org
www.iranippon.jp